

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | 日本語と朝鮮語における動詞による関係表示について：問題提起と展望 |
| Author(s) | 深見, 兼孝 |
| Citation | ニダバ, 23 : 21 - 27 |
| Issue Date | 1994-03-31 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044729 |
| Right | |
| Relation | |



日本語と朝鮮語における 動詞による関係表示について

— 問題提起と展望 —

深見兼孝

はじめに

本小稿は、日本語と朝鮮語の対照研究という観点から、表題の事柄についてどのような問題があるかを指摘し、その研究の展開の方向を略述したものである。

1. 動詞による関係表示

これには大きく分けて2種類が考えられる。ひとつは、補語と述部の関係、もうひとつは文と文の関係である。

日本語は、述部が文末に位置し、それに先行する名詞が述部の意味を補う補語として述部と格関係を結ぶという基本的な文の構造を持っている。そしてその格関係を表示するのが格助詞である。言い替えれば、格助詞は補語と述部の（格という）関係を表示しているのである。ところが、実際には次のように格助詞にさらに動詞が付加されている場合がある¹⁾。

1) a. このような保守党の新しい政策に対して労働党は激しく反対した。

b. iləhan posutaŋi səloun cəŋcheke tɛhɛ notoŋtaŋin kyəlliyəlhake pantehssta.

2) a. 過去1世紀の歴史は、列強間の利害関係の衝突によってそのような合意が不可能であるということを示している。

b. cinan han seki,i yəksanin yəlkəŋkan,i ihɛ kwankyɛ,i chugtollo malmiama
k,ləhan hap,i ka pulkan,ŋhatanin kəs,i l poyə cuko issta.

3) a. 「かさざぎ（漫画の主人公の通称）」こそ漫画を通して再現された今日のヘラクレスでありベルセウスである。

b. kkachiyamallo manhwal,i tɥonhɛ cəhyəŋtəŋ on,i,i helakh,i les,yo phel,i seus,i ta.

このような場合、動詞に先行する格形式は述部との関係ではなく、動詞によって直接決定されている。そして、動詞は一定の形式を取って意味的にその格形式におかれた名詞（または名詞相当の語）と述部との関係を具体的に、かつ詳細に規定している。以下、これを仮に「動詞による関係表示」と呼ぶことにしたい。

さて、朝鮮語研究においては、上で述べたような意味での補語という概念は一般的では

ない。また、日本語では主語も補語として述部を補う機能を持っているとされ、その優位性が否定されているが、朝鮮語では主語の優位性が一般的に認められている。しかし、述部が文末に位置し、先行する名詞が格表示要素によって述部と格関係を結んでいるという点については朝鮮語も日本語と同じである。そして、上の例で見るように、格表示要素にさらに動詞が付加され、動詞による関係表示が認められることも日本語と同じである。

もう一つの動詞による関係表示は、次のように、接続文の下位文（先行節）と下位文（後行節）の接続部において見られる。ここでも、動詞は一定の形式を取って格成分に後続しつつ、前後の下位文の接続関係を規定している。

4) a. 石綿の生産と消費が増すにしたがって石綿による被害も深刻になっていった。

b. səkmyən,i sɛŋsankwa sopika n,iləname ttala səkmyəne ,ihan phihəto
simkakhɛcyəssta.

あるいは、これに類するものとして、次のように、一定の格形式を取った、先行文の内容を受ける文頭の代名詞に後続して、先行文との関係を規定する場合もある。

5) a. これによって、イギリスの二党政治は労働党が万年野党としてのみ残る場合一党政治になる危険性もなくはない。

b. ie ttala yəŋkuk,i yaŋtag cəŋchin,n notogtagi mannyən yatag,loman namil
kyəŋu iltag cəŋchika təl wihəmsəŋmacə əpsci anhta.

2. 問題提起

① リスト

まず、関係表示に参加する動詞とその形式、および先行する格形式の目録を作成することが問題となる。この点について、日本語と朝鮮語は共通の基準を設けることができそうである。

日本語と朝鮮語の単文では、述部が文末に位置するので、両語の動詞にあっては文を終結させる機能と述部を構成する機能は不可分の関係にある。すなわち、どちらか一方の機能を持つ動詞は必ずもう一方の機能も持っていると予測されるのである。ところが、実際には文を終結させる機能を持たない（したがってその機能を担う形式も持たない）、すなわち述部を構成する機能を持たない動詞が存在する。たとえば、日本語の「対する」、「関する」、「比する」、朝鮮語の tshata, kwanhata, pihata, pulkuhata 等がそれである。これらは特定の形式をもって格形式に後続し、上で述べたような関係表示を行う。また、日本語の「かかわらず」もこの部類に入れていだろう。

次に、両語の動詞の中には述部を構成する機能を持ちながら、一方では関係表示機能も持つものもある。例えば、日本語の「したがう」、「ともなう」、「つれる」、朝鮮語の ttal,ita 等がそれである。これらの動詞の特徴は、述語動詞としては具体的な意味を持ちえる一方、特定の形式で特定の格形式に後続し、意味の具体性が薄れ、先行名詞と述部と

の関係を規定する働き、すなわち関係表示機能を持つようになる場合があるということである。また、「よる」や *malmiamta* 等は述部動詞としても関係表示の動詞としても用いられるが、これらは述部動詞としても意味に具体性を欠いていると言えよう。

以上のような特徴を持った動詞を、網羅的とはいかないが、試みに列挙してみる。

日本語

ある：(に) あって／おく：(に) おいて／(にも) かかわらず／関する：(に) 関し、関して／したがう：(に) したがって、したがうと、したがえば／する：(と) して、すると、すれば／対する：(に) 対し、対して／通じる：(を) 通じ、通じて／つく：(に) つき、ついて／つれる：(に) つれ、つれて／とおす：(を) とおし、とおして／ともなう：(に) ともない、ともなって／とる：(に) とり、とって／反する：(に) 反し、反して／比する：(に) 比し、比して／めぐる：(を) めぐり、めぐって／もつ：(を) もって／よる：(に) より、よって、よると、よれば

朝鮮語 ([] 内はおよそ対応する日本語)

issta:(-e) *issəse* [(に) おいて] /(-eto) *pulkuhako* [(にも) かかわらず] /
kwanhata:(-e) *kwanhayə*, *kwanhe*, *kwanhesə* [(に) 関して] /*ttalita*:(-e) *ttala*,
ttalase [(に) したがって、よって], *ttalimyen* [(に) したがえば、よれば] /
təhata:(-e) *təhayə*, *təhe*, *təhesə* [(に) 対して、ついて] /
thoghata:(-l,l) *thoghayə*, *thoghe*, *thoghəsə* [(を) とおして、通じて] /
pihata:(-e) *pihayə* [(に) 比して] /*tulləssata*:(-l,l) *tulləssako* [(を) めぐって] /
kacita:(-l,l) *kaciko* [(を) もって] /*wihata*:(-l,l) *wihayə*, *wihe*, *wihəsə* [(の) ために] /
ihata:(-e) *ihayə*, *ihe*, *ihəsə* [(に) よって], *ihamyən* [(に) よれば] /
inhata:(-lo) *inhayə*, *inhe* [(に) よって] /*malmiamta*:(-lo) *malmiama* [(に) よって]

② 形態面での制限

日本語について、「複合助詞」あるいは「後置詞」という範ちゅうを設定する研究者がいる。これは、日本語文法論の伝統的な還元主義に対する反省から出てきたものであり、上で列挙した動詞(と先行格助詞の組合せ)は「複合助詞」あるいは「後置詞」とだぶるものが多い。しかし、筆者は、その表す意味が「単なる構成要素のプラス以上の意味を持っている」という設定基準²⁾が曖昧であるという点において、「複合助詞」という概念に必ずしも賛同できない。また、「後置詞」は「補助的な単語」とされている³⁾が、「後置詞」こそ先行格形式とその格形式におかれた名詞と述部との関係を規定しており、どのような意味で「補助的」なのかやはり疑問を禁じ得ない。

ところで、日本語において動詞が「複合助詞」の構成要素である場合、その動詞は、一般の動詞なら取りうるはずの形態上の多様性に制限があり、それゆえ一般の動詞なら担っているはずの文法範ちゅうのいくつかを喪失していることが指摘されている⁴⁾。このこと

自体は上で列挙した動詞についても、日本語朝鮮語を問わず、同じことである。しかし、問題はその内容であろう。すなわち、関係表示を行う動詞にはどのような形態面での制限があるのか、言い替えれば、どのような文法範ちゅうを喪失し、どのような文法範ちゅうを保持しているのか、という点について両言語を対照する必要があるのである。

ここで注意したいのは、形態面での制限には複数の由来が存在するという点である。例えば、丁寧さの表示が日本語では許される動詞もあるが、朝鮮語ではそれが存在しない⁵⁾。これは日本語に限って言えば関係表示の動詞であるが故の制限とみなすこともできよう。しかし、朝鮮語で同じことが言えるだろうか。朝鮮語では、日本語と違って動詞は述語に立つ場合にしか丁寧さの表示ができない。したがって、朝鮮語で丁寧さの表示ができないのは、関係表示の動詞だからではなく、朝鮮語の一般的な形態上の規則に抵触するからなのである。また、おそらく朝鮮語でも日本語と同じように過去の形を取ることができない。これは（事実とすれば、の話だが）朝鮮語では関係表示の動詞故の制限とみなせるが、日本語では一般的な形態上の規則による制限である。

このように、形態面での制限にはそれぞれの言語の一般的な形態上の規則に由来するものがある。しかし、その一方では片方の言語にこの種の制限が存在する時、もう片方の言語においても、形態論上の必然性がないにもかかわらず、程度の差こそあれ同様の制限が存在する場合もあるのである。また、上で関係表示の動詞であるが故の制限とみなせるとした2つの現象も同じ価値を持っているとは言い難い。形態上の制限についてはその意義づけを慎重に行っていくなくてはならないのである。この場合、対応する動詞同士の対照も勿論であるが、両言語の関係表示の動詞全体を視野に入れて考察することも重要であろう。

③ 用法と意味

上のリストから分かるように、両言語の関係表示機能は、その範囲において、総体的にはあまり差がないものと推測されるが、それぞれの言語における個々の（特定の形に置かれた）動詞の担う機能の範囲についてはどうなのかが問題となる。具体的に言えば、述部動詞との関係を表示する動詞の場合、それが形成する構文における基本的な構成要素（述語や先行する名詞等）間の意味的な相互関係、述部動詞の要求する格形式、実際に単一格形式との置き換えが可能かどうか等が、両言語の共通した問題として考えられる。

これらのことに関する対照記述が語学教育にとって重要であることは言うまでもないが、両言語の関係表示機能を遂行する動詞のいくつかは、共通の漢字（もしくは漢文の語法）を基にして形成されていることを考えれば、それはなおさらである。というのも、共通の漢字を基に形成されている語は、経験上相互の干渉が大きい一方、その異同に関しては具体的な用例に基づいた考察がほとんどなされていないのが現状だからである。例えば、朝鮮語の *-e tehaye/tche* は日本語の「に対して」と「について」に対応するが、朝鮮語の

方からみれば、「に対して」と「について」の境界はどこに引かれるのか、また、「に関して」と -e kwanhaya/kwanhe はどのような差異を示すのか、といったようなことが問題となる。

その場合、上で述べた3つの点すべてについて対照記述が必要であろう。例えば、日本語の「目覚める」は二格補語を取り、意味的に対応する朝鮮語の nunttita もその対象を表す名詞は -e 格に置かれる。しかし、次の例では、日本語の「に対して」が述語「目覚める」との関係表示ができないのに対して、朝鮮語の -e tēhe は述語 nunttita との関係表示が可能である⁶⁾。

6) a. 彼らは精神的、肉体的に成長しながら自我??に対して目覚め…

b. kɪtɪlɪn cəŋsincəkɪlo yukchecəkɪlo səŋcəŋhamyənse caaɛ tēhe nunttiko …

これは結局共通の漢字を基に形成された「対する」と tshata の意味の違いに帰されるであろう。このように、動詞による関係表示に関する対照研究は、漢字を基に形成された語に関する具体的な対照研究の一環でもありうるのである。

単一格形式との変換については、朝鮮語において、ある種の先行格形式と動詞からなる「複合格助詞」が単一格形式と変換ができるかどうかは、その「複合格助詞」が付加された名詞が文の必須要素であるかどうかによっていて、そのことはさらに述部とその名詞の意味関係に依存しているという議論がある⁷⁾。論者の提示した単一格形式との変換の是非については筆者の近くにいた母語話者の間に異論があり、この議論の受け入れには慎重にならざるを得ないのだが、単一格形式との変換に意味づけを試みた点、また、それを先行名詞と述部の意味関係に求めようとした点、さらに、日本語でも（明言はされていないが）類似した現象が見られることを示した点において、評価されよう。結局、単一格形式と変換については、変換の是非、および特定の先行格形式と動詞の組合せが特定の単一格形式に変換できることがどのような意味を持っているのか、それについて両言語がどのような異同を見せるかを、意味を述部と名詞の意味関係に基づいて、探り出す必要があるのである。

以上述べてきたことが、関係表示機能を遂行する動詞に関する主たる問題であろう。以下、おそらくは周辺的となるかもしれないが、残された問題について簡単に触れておきたい。

ひとつは、関係表示機能を遂行する動詞が連体表現に現れたときの処理である。これは、動詞は述部との関係を表示しないので取り扱わないで済むことかもしれない。しかし、例えば「対する」は「だれそれに対して愛する」とは言えないが、「だれそれに対する愛」とは言える。このように、連体表現におかれた場合も考察しなければ、関係表示機能を遂行する動詞の機能を完全に把握したとは言えないであろう。これに関連して、「対する／対しての」のように連体表現が動詞の活用形によるものと助詞によるものの2つがある時の、それらの差異も扱うことができよう。朝鮮語でも前半の問題は日本語と共通であろう。

しかし、後半の問題についてはそれが朝鮮語で存在するかどうかから検討をしなければならない⁸⁾。

もう一つの問題は、「に対して/対し」-e tɕhaya/tɕhɛ/tɕhesə のような類似の形式間の差異である。たとえば、朝鮮語では -e tɕhesə は本来 -e 格を要求する動詞が述語である時は用いられず、-e tɕhaya/tɕhɛ はそのような制限を受けない、といった分布上の差異が存在する可能性がある⁹⁾。もしそれが事実なら、それは当然 tɕhesə と tɕhaya/tɕhɛ の意味の差に帰すべきであろう。これは本質的には活用形の機能の差異の問題ではあるが、その具体的な例として考察することも可能である。

④ 通時的考察

通時的考察は本来対照研究の中に含まれないであろう。しかし、①のリストを見ても分かるように、両言語の動詞によって表示される関係概念は、その内容にしろその種類にしろ、また、共通の漢字（もしくは漢文の語法）を基に成立した語が多く含まれている点から言っても、偶然と言うにはあまりにも類似している。そこで、これを両言語の言語接触の結果だと仮定することは、あながち的はずれのことではあるまい。となると、それぞれの言語における動詞による関係表示の起源と歴史的な変遷（もちろん、上で述べた3つの事柄について）は常に比較されつつ考察されなければならないだろう。この項目を取り上げた理由はここにある。

3. 研究の展望（おわりにかえて）

大まかに言えば、動詞が関係表示を行うことは、現代語が一方では格形式や接続形式が表示する事柄をより詳細に、一方ではそれらだけでは表示しきれない複雑な事柄を表現する必要があるということの意味する。問題はいったいそれがどのような事柄なのか、それについて日本語と朝鮮語ではどのような異同を示すのか、ということであろう。そして、この問題は結局関係表示の動詞が両言語においてどのような位置にあるかという問題に帰着するだろう。

両語において関係表示の動詞（この名称は使われたことはないが）の研究は、ようやく始まったばかりである。日本語のそれがやや先んじているような印象も受けるが、どんぐりのせい比べの域を出ていまい¹⁰⁾。したがって、現在のところ関係表示の動詞についての筆者の知識はきわめて貧しく、重要な問題を見落としている可能性や問題の重要度を見誤っている可能性も否定できない。しかし、2.で述べたような点について両言語の異同を詳細に記述していくことが、両言語における関係表示の動詞の位置を探る上で重要な積み重ねになろう。またその中で、今は暫定的なものに過ぎない「動詞による関係表示」という概念も、それに参与する動詞の範囲も、試行錯誤を通して、明確になって行くものと思われる。

注

1. 朝鮮語の例文は雑誌「한국인 (韓国人)」の1989年1月号～3月号からのもので、日本語の例文は筆者によるその翻訳である。
2. 松本(1990)参照。
3. 佐藤(1989)参照。
4. 注2.の文献および砂川(1987)参照。
5. 塚本(1990)参照。
6. 拙稿(印刷中)参照。
7. 注5.の文献参照。
8. 注5.の文献によれば、朝鮮語においても日本語と同様の2種類の連体表現が見られるとあるが、筆者の近くにいる母語話者は、いわゆる「冠形格」-iによる連体表現(ex. -e tɛhesəi)の存在について、一部の動詞を除いて否定的である。これは母語話者間のさまざまな背景の違いに起因する可能性があり(もちろん単なる思い違いかもしれない)、文字化された資料によっても確認しておく必要がある。
9. 注6.の文献参照。
10. 以上の注で挙げた文献の他に、江田(1987)、金仙姫(1990)、蔦原(1984)、森田・松本(1992⁴)参照(いずれも日本語について)。

言及した文献

- 江田すみれ(1987) 「名詞+のこと」の意味と用法について—「について」とのかかわり— 日本語教育62 pp.68-90
- 金仙姫(1990) 現代日本語における「について」「に関して」「に対して」の用法上の差異について—アンケート調査を中心に— 国語学研究(東北大)30 pp.49-86
- 佐藤尚子(1989) 現代日本語の後置詞の機能—「～について」と「～に対して」を例として— 横浜国大國語研究7 pp.35-44
- 砂川有里子(1987) 複合助詞について 日本語教育62 pp.42-55
- 塚本秀樹(1990) 日本語と朝鮮語における複合格助詞について 崎山理・佐藤昭裕(1990代表編) アジアの諸言語と一般言語学 pp.646-657 三省堂
- 蔦原伊都子(1984) 「～について」 日本語学3-10 pp.73-80
- 深見兼孝(印刷中) 現代朝鮮語の`-ey tayhayse`と`-ey kwanhayse`について—日本語の「に対して」、「について」、「に関して」との対照—(1) X-ey tayhayse V 広島大学留学生センター紀要4
- 松本正恵(1990) 複合辞の設定基準・尺度設定の試み 早稲田大学日本語研究教育センター—紀要2 pp.27-52
- 森田良行・松本正恵(1992⁴) 日本語表現文型 pp.7-14 アルク